



博物館見学の紹介 [11月分:その①]

11月は小学校3校(全て6年生)と中学校1校が見学に来館しました。小学校は特別展「縄文ワールド」の見学と学習ガイドを使った常設展見学を行い、中学校は「職場理解」を中心に、次年度の職場体験につなげることも意識した見学でした。



最初に、11/11(月)に来館した矢沢中学校第1学年の様子から紹介します。学年61名を3グループに分け、①バックヤード見学 ②縄文ワールド見学 ③職場理解の講義の3つをローテーションして実施しました。



職場理解の講義

また、担当の先生からは、次年度の職場体験を見据えて、解説に関していくつかのリクエストがありました。それをもとに、次のように計画して対応しました。



展示の意図を解説



土偶写真を解説

- ①バックヤード見学では、収蔵庫も見学し、**寄贈資料の取り扱い**等を解説する。
- ②特別展「縄文ワールド」の見学では、**展示に関する意図や工夫**等も解説する。
- ③職場理解講座では、**学芸員になるための道筋**等についても説明する。



管理業務を説明

生徒の皆さんは、集中して学芸員の話聞いて、疑問に思ったことを質問し、必要なことをメモしながら見学していました。普通の見学ではなく、しかも興味深い内容だったので、心に残る学習だったようです。



収蔵庫での解説

生徒の感想(一部)

- ・「縄文ワールド」の写真がきれいで、並べ方が工夫されていることが分かった。
- ・約4万点の資料があることにびっくりした。
- ・資料保存のために、温度や湿度が年間を通して一定に保たれていることに驚いた。
- ・(寄贈された資料数を見て)発表していない作品が多くてびっくりした。
- ・学芸員について、詳しく教えてもらってよかった。

2学年の職場体験の前に職場理解という内容で事業所を見学するのは、生徒にとって有意義なことだと考えられます。それが可能な事業所として、博物館は適しているかもしれません。今回の見学内容は、矢沢中学校の担当の先生から、次年度につながる学習としたいとの相談を受けたものです。他の中学校でも、職業教育の一環として計画を検討してみてもいいのではないでしょうか。

裏面に続く

博物館見学の紹介【その2】

次は小学校3校の様子を紹介します。



湯
ガイドを使い自主学习



笹
ガイドを使い自主学习



花
花巻城を解説



湯
ガイドの答えを解説

11/5(火)に来館した笹間第一小学校と11/21(木)に来館した湯本小学校は、どちらも単学級なので、同じ流れで実施しました。

常設展は、まず学習ガイドを使った自主学习から始め、後半は全員で学芸員の解説を聞きながら、答えを確認していきました。

特別展「縄文ワールド」は、学芸員が展開写真などの展示を一通り解説した後、各自が再度詳しく知りたい資料を自分で選んで見てもらいました。



花
ガイドの答えを解説



花
入口の遺物写真を解説



湯
動物の土偶などを解説



笹
詳しく知りたい資料を見学

また、11/22(金)に来館した花巻小学校は、路線バスを利用して賢治記念館等を見学後、12時に来館し、14時4分の路線バスで帰校する計画でした。

常設展と企画展を2学級で交代して見学しました(流れは上記2校と同様)。



笹
展開写真を解説



花
展開写真を解説

児童の感想(小学校3校分:一部)

- ・花巻の歴史についてのものや、土器や土偶を初めて見て、すごく面白かったし、勉強になった。
- ・土偶の形で女性や子どもがわかって奥深いと思った。
- ・四角や植物※で刀の名前が決まっているところが面白と思った。(→※:直刀や蕨手刀のこと)
- ・本物の土偶や歴史上の人物の名前を知ることができてよかった。展開写真や実物があって分かり易かった。見たことがない物を知ることができてよかった。
- ・花巻城があることは知っていたけど、どんな人物がいたかは知らなかったし、岩手県が一番多く土偶が見つっていると知ることができて良かった。
- ・土偶にはいろんな種類があって、その一個一個には名前がついてあって、いろんな顔とかいろんな形とかがすごく面白と思った。

11月24日(日)に、特別展「縄文ワールド」の**記念講演会**が当館で行われました。講師は、**原田昌幸氏(國學院大学兼任講師・元文化庁美術学芸課主任文化財調査官)**でした。

「縄文土偶のはなし —その多様な世界—」というタイトルで行われた原田氏の講演は、縄文土偶の魅力に溢れていて、土偶の造形の美しさやその造作の巧みさ、作り手の意識にまで話が及んで、参加者は一様に満足した様子でした。

「縄文ワールド」は来年の1月13日(月・祝)まで当館で開催しています。冬休み中にぜひ来館し、縄文の美の世界を体感していただきたいと思います。



原田昌幸氏